

飛鳥出土の二つの尖頭器

はじめに 現在調査中の飛鳥池遺跡は、古代の総合工房として注目を集めているが、同遺跡からは縄文時代や弥生時代の遺物も出土している。今回は縄文時代草創期の二点の尖頭器について紹介する。

出土した尖頭器は木葉形尖頭器（飛鳥藤原第84次調査）と有舌尖頭器（飛鳥藤原第87次調査）で、2点とも原位置を離れた7世紀の整地土層から発見された。

木葉形尖頭器（図左） 裏面左に残る剥離面から横長剥片を素材としたことがわかる。現存長は9.1cm、先端をわずかに欠損するが10cmほどに復原できる。最大幅（3.7cm）は胴部中央にあり、先端、末端へと弧状にのび、基部はやや丸みをもつ。最大厚は1.0cm。尖頭部は基部に比して厚くするために剥離角が小さく、逆に基部は器厚を薄くするため剥離が器体深部にまで達する。尖頭部に強度をもたせ、基部は器厚を薄くして着柄しやすくするための加工であろう。周辺に細かい最終調整を施して形状を整えている。

有舌尖頭器（図右） 先端と舌部を欠損するが、全長7cmほどに復原できる。現存最大幅2.6cm。現存最大厚0.5cm。基部は幅広で逆刺を持たず、逆三角形の舌部両側が内彎する。形態的には西日本に広く分布する柳又型の範疇に入る。表面、裏面とも明瞭な押圧剥離が施され、細かい調整加工で舌部と器体周辺を整えている。素材剥片の

剥離面は残っていない。有舌尖頭器は奈良県内では他に明日香村檜前・脇田遺跡（北村 1988）の奈良時代後半の溝出土例、橿原市川西町採集例（秋枝 1972）、榛原町内牧採集例（柳沢 1990）などがある。有舌尖頭器は投げ槍の一種として使用されたと考えられ、その使用法からも単独出土例が多い。近畿地方でも表面採集か、二次的に移動した状態での発掘例がほとんどで、土器や他の器種の石器などと共存することなく、遺物組成に関しては不明な点が多い。他地域の遺物組成による編年（増田 1981）によれば、細隆起線文土器および石鏃を伴う第Ⅲ段階として位置づけられている。

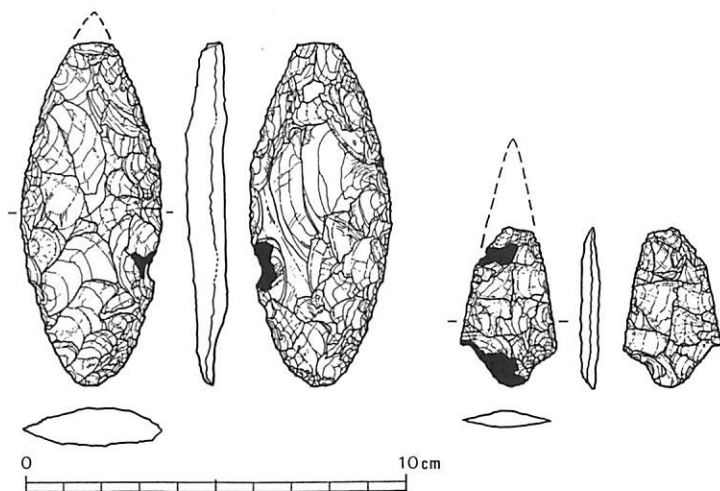
尖頭器の年代 二点ともサヌカイト製の尖頭器であるが、両者には風化の度合に明瞭な差が認められる。すなわち木葉形尖頭器がより風化の進んだ灰色を呈するのに対して、有舌尖頭器はより原材に近い暗灰色を呈している。この差が両者の製作の時期差を示すのか、あるいは土中の環境の違いに起因した現象であるのかは定かではない。しかし該期の有舌尖頭器に木葉形尖頭器が伴うことは、十分あり得ることである。周辺における旧石器時代の遺跡が未発見である以上、この木葉形尖頭器も有舌尖頭器と近い時期、あるいは同時期の所産と考えた方がよいだろう。

まとめ 7世紀の整地土層出土の遺物ではあるが、飛鳥池周辺、特に飛鳥川右岸の飛鳥池から南東方向にのびる丘陵上に未発見の縄文時代草創期の遺跡があり、往時にはこの二つの尖頭器を使って狩りをしていたことが偲ばれる。このことは二本とも先端部が尖頭器通有の折れを示していることから明らかである。

（水戸部秀樹・松村恵司／飛鳥藤原宮跡発掘調査部）

参考文献

- 北村憲彦：1988「檜前・脇田遺跡」『明日香村遺跡調査概報』昭和62年度 明日香村教育委員会
 秋枝 芳：1972「奈良県橿原市川西町発見の有舌尖頭器」『古代学研究』第63号 古代学研究会
 柳沢一宏：1990「奈良県宇陀郡榛原町内牧採集の有舌尖頭器」『旧石器考古学』41 旧石器文化談話会
 増田一裕：1981「有舌尖頭器の再検討」『旧石器考古学』22 旧石器文化談話会



飛鳥池遺跡出土の木葉形尖頭器と有舌尖頭器 1:2